視察用

様式(細則 5-2)

平成 30 年 5 月 30 日

浜田市議会議長
川 神 裕 司 様

議員名　西田　清久　㊞

調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1．期　　間　　平成３０年５月９日（月）～平成３０年５月１１日（水）

2．視察先および研修テーマ

(1)場所　　栃木県佐野市　佐野市役所
　内容　　特定非営利活動法人エコロジーオンライン
　　①　認知症ケアの取組について
　　「オトトカラダ」プロジェクト
　　②　カラフルファームの取組について

(2)場所　　埼玉県横瀬町　横瀬町役場
　内容　　官民連携のまちづくり「よこらぼ」について

3．参加者　　川上幾雄、永見利久、串崎利行、上野茂
　　田畑敬二、西田清久、澁谷幹雄、川神裕司

4．調査経費　　３８９，２２０円／８人＝４８，６５２円

浜田市議会 受付 30.5.30

５．調査研究活動の概要

１．特定非営利活動法人エコロジーオンライン

理事長：上岡裕　　事務局長：上岡七生美

エコロジーオンライングループは、活動を始めて17年。ライターや編集者、マンガ家、カメラマン、ミュージシャン、Cafeオーナー、建築家などが参加し、いろいろな実践を通して、音楽、アート、エンターテインメントなど、様々なコンテンツを医療、介護、まちづくりの現場に届ける取り組みをしている。

① 認知症ケアの取組について

「オトトカラダ」プロジェクト

上岡理事長は、ソニーミュージックエンタテインメントの出身で、これまで音楽を通して環境メッセージを発信する仕事を多く手掛けておられ、この事業の元は、アメリカから始まった認知症ケアの取組「Ｍｕｓｉｃ＆Ｍｅｍｏｒｙ」で、認知症の患者さんに昔好きだった音楽を携帯型音楽プレイヤーで聴いてもらい、心や身体を少しづつ活発化させていくというプログラムである。

主な取組

・音楽による認知症ケアの開発
・コンテンツと脳、介護の関連性の研究・実践
・高齢者介護に活用するコンテンツの開発
・認知症予防をテーマとするツーリズムの開発
・音楽による高齢者の居場所づくり
・障がい者の雇用の場としての農林業の整備

特に、音楽による認知症ケアの取組は、iPodにそれぞれの個人にふさわしい楽曲や楽曲リスト、即ち「パーソナルソング」をダウンロードして提供する。これは、認知症、身体的困難を伴う疾患、社会的な困窮度にかかわりなく、このプログラムを活用することが可能である。

このパーソナライズされた音楽の有効性については

・興奮状態やアルツハイマー症状に伴う夜間の幻覚や錯乱の減少
・患者同士の協力と周囲への関心度合の増大
・周りの人との関わり方や社交性の向上
・透析、心臓疾患、寝たきりの患者に対するケアの充実
・痛み、うつ状態、不安や不眠症に苦しむ患者への薬物使用を伴わないケア
・高血圧疾患も含む施設の患者に対する鎮静、リラックス効果

などがある。

② カラフルファームの取組について

エコロジーオンラインは、2016年に農業法人(株)カラフルファームを設立し、農業分野での循環型農業を支援している。背景として、国連を中心に広がっている「持続可能な開発」も、日本では少子高齢化による人口減で、第一次産業を経済の柱とする地方の市町村の持続可能性が損なわれているということがある。

そうした課題に対応するための新しい農業を模索する場がカラフルファームである。現在、トルコキキョウやソバ、エゴマ、ジャガイモなどを栽培し、農林福連携事業も進め、子ども、学生、高齢者、障がい者など誰もが農作業によって得られる多彩な効用を享受できる“ユニバーサル農業”を目指している。

具体的な取組として

⑴ ユニバーサル農業を目指す農業法人との連携
就労支援施設からの雇用の受け皿となる農業法人の育成

⑵ 就労支援施設が手がける農業の支援（就労支援センター「風の丘」）
利用者がつくった野菜を販売するマルシェの活性化支援

⑶ 就労支援施設で働く人材と農業生産法人とのマッチング
若手農家たちと就労支援施設との連携をコーディネート

⑷ 里山保全事業での障がい者雇用の模索（里山ウェルネス研究会）
長野県飯山市での林福連携事業

などである。

所感

認知症機能を落とさないためのキーワードに“音と香り”の事を言われ理解した。加えて、脳から過去のデータを呼び戻す五感で感じるすべてのものに要因があるとも思った。即ち、幼少から多感な十代の良い経験、体験が多いほどそのデータが“脳”に蓄積されることを確信した。

認知症ケアの取組については、理事長の上岡氏の家族の経験もあり、これから全国的にも増加傾向で、認知症の改善は難しいけれど遅らせることは出来るという強い思いから積極的に取り組んでおられると感じた。

認知症予防の取り組みは、自治体や病院、高齢者施設、公民館、地域など様々な分野で行われているが、「オトトカラダ」プロジェクトは、一歩踏み込んだ取組で広く浸透していけば、目に見えない効果が期待できる思う。

またこの事業は、介護保険施設以外のどこでも出来るため、私たちも身近なところから実践してみたいとも思った。

カラフルファームの取組は、日本全国、特に地方自治体のほとんどが目指している

方向性で、さきがけの良い取り組み事例だと思った。しかしながら、農林福連携事業と言葉で言うのは簡単であるが、様々な壁や課題を克服しなければならず、エコロジーオンラインの上岡理事長のような人材が必要不可欠である。

２．官民連携のまちづくり「よこらぼ」について

説明者：富田能成（横瀬町長）　他、執行部・議会関係者

埼玉県秩父郡横瀬（よこぜ）町は、人口 8,４00 人の町で、「よこらぼ」とは、「横瀬町とコラボ（協力）するラボ（研究所）」という意味で、企業などから提案を受けて町が持つ資源を共同で有効活用する仕組みである。

それは、これまでと同じようなことをやっていては、まちの未来は悲観的で、未来を変えるためには新しいチャレンジが必要と、民間活力をフルに活用し、外部からヒト・モノ・カネ情報を継続流入させ、化学反応、を促す戦術である。

また、「予見できない未来」をたくましく、楽しく生き抜いていける子どもたちを育てるために、創造力、柔軟な対応力、楽しめること、夢中になれること、等々心の領域、感受性がより重要と、早い段階から多様な世界に触れることにも取り組む。

「よこらぼ」誕生の背景には、町が抱える課題として

⑴　人口減少による町の活力の衰退

⑵　小さな町で自らの資源のみによる事業展開の限界

企業が抱える課題として、地方でプロジェクトを展開したいが・・・。

⑴　フィールドがない

⑵　自治体コネクションがない

などがあり、地方創生機運の高まりもあって、**自治体×民間**で、地域をより良くできないか？という考えと、富田町長の強いリーダーシップで「よこらぼ」が誕生した。

企業からの提案は、「よこらぼ」web サイトより申し込み（毎月 25 日 24 時締切）、審査票シート作成により問題点をチェックされ、翌月 25 日前後に「よこらぼ」審査会で 10 分プレゼン、10 分質疑応答により点数が付けられ、「よこらぼ」審査会委員の評価点数と意見により町長が最終判断され、採択になればプロジェクトが始動する。

これまで「よこらぼ」開始から 1 年半で、提案 62 件のうち採択が 35 件と当初の想定を上回る展開となっている。

採択された案件（平成 28 年 10 月～平成３０年４月末まで）を主要分野でみると

＊ 教育・子育て関連　　７件

＊ シェアリングエコノミー　　５件

＊ 新技術活用・開発　　１０件

所感

視察を快く受け入れていただき、富田能成町長が先頭に立って熱い想いで説明をされた。はっきりと大きな声で自信をもって話される姿勢が、この町の空気感や職員との一体感、また二元代表制の議会との軸のぶれない関係が伝わってきた。

知名度、地形や産業、人口規模や都心からの距離など地域環境のメリットデメリットを一石二鳥で解決しそうな「よこらぼ」の取組みは、正に官民連携のモデルだ。

この事業の窓口は、町長直轄の「まち経営課」に一元化しているところがすばらしい。全国に消滅可能性自治体が数えきれないほどあり、どこも共通の悩みや課題を持っているが、地方創生を突っ走っていくには、地域内外から芽吹き続ける大小の良いアイデアや情報を活かし、育む自治体の総合力だと思う。官民連携プラットフォーム「横瀬町とコラボする研究所」（よこらぼ）は、未来に育つ事業だと確信した。